

# 飛鳥寺西辺の儀礼空間

## Ritual Space in the Western Section of Asukadera

木下正史

はじめに

- ① 飛鳥寺の寺域とその変遷
- ② 飛鳥寺南方の状況
- ③ 『日本書紀』に見える飛鳥寺西
- ④ 飛鳥寺西一帯の発掘成果
- ⑤ 奈良国立文化財研究所による飛鳥寺西辺地域の調査
- ⑥ 飛鳥京第77次(小字土木)調査
- ⑦ 石神遺跡・水落遺跡の構造

結び

### 【論文要旨】

6世紀末に建設された飛鳥寺は飛鳥地域最初の本格的施設である。それは南北2km余、東西400mほどの狭小な飛鳥盆地内の中央に位置し、7・8世紀を通じて大伽藍地を維持した。その存在は7世紀を通じて集中的に営まれる宮殿等諸施設の立地・構成など、盆地内の土地利用の仕方に大きく影響を及ぼし、それを大きく規制した。飛鳥寺西方一帯については、『日本書紀』の記事によって、7世紀中頃から藤原京遷都頃にかけて、蝦夷、隼人等に対する服属儀礼の場として利用し続けられたことが明らかにされつつある。しかし、その空間利用や施設の在り方、時期的変遷等の具体像に関しては、考古学的成果を総合して解明が進められるべき課題である。本稿では、飛鳥寺周辺における考古学的資料を中心に研究の成果を整理し、いくつかの問題について考察する。

飛鳥寺西一帯は、飛鳥寺西門西方を中心とする南部と、水落・石神遺跡のある北部とからなる。それぞれ構成内容を異にするが、全体として宮廷付属の儀礼の場として機能した。南部は、斉明朝に南北150m以上、東西70m以上の範囲が建物のない石敷・礫敷の広場として整備され、天武朝に継承されている。北部でも斉明朝に画期的な造営が行われている。石神遺跡では格式の高い大規模建物が密集して建ち並び、服属儀礼等執行の中核施設として整備されるようになる。さらに、この中核施設の南に接して水時計施設(水落遺跡)が建造される。天武朝には斉明朝とは異なる計画で建物群の造営が行われるが、広場状空地が広がる南部と、建物が建ち並ぶ北部とからなる服属儀礼の場の基本構成は継承されている。藤原京遷都後、天武朝の建物等は撤去され、新たな計画で造営が行われる。服属儀礼の場としての機能は終焉する。以上のように、空間利用状況の復原を進めるとともに、儀礼施設・水時計施設等を建設するに至った歴史的背景についても考察する。